

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530410

研究課題名(和文) 開発援助金融とドイツ：1956 - 1972年 - 世界銀行融資との関連において -

研究課題名(英文) Development Aid and Germany in the Context of the World Bank's Finances:1956-1972

## 研究代表者

石坂 綾子 (ISHIZAKA, AYAKO)

愛知淑徳大学・ビジネス学部・教授

研究者番号：40329834

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツの開発援助への本格的な参入は1950年代半ばであった。ドイツは援助を受け入れる国から援助資金を供給する国へと早期に転換し、61年には連邦経済協力省が設立された。ドイツと世界銀行との関係は、この50年代後半から60年代前半に構築された。60年代後半には、ドイツにおいて世銀債が大規模に発行され、世銀との関係が強化された。この過程において、ドイツ銀行やドレスナー銀行も、世銀融資に積極的に関与するようになった。世銀はEEC未加盟のヨーロッパ諸国への復興援助のみならず、アジア・中南米諸国への開発援助にマルクを活用した。

研究成果の概要(英文)：Germany's full-fledged participation in providing development assistance began in the mid-1950s. The nation rapidly turned around, changing from one that received aid to one that supplied development finance; it established the Federal Ministry for Economic Cooperation in 1961. Germany's relationship with the World Bank developed substantially from the late 1950s through the early 1960s. In the late 1960s, Germany issued large volumes of World Bank bonds, further strengthening its relationship with the organization. During this process, Deutsche Bank and Dresdner Bank also became actively involved in the World Bank's finances. The World Bank used Deutsche Marks not just for reconstruction aid to European countries that were not members of the European Economic Community(EEC), but also for development aid in Asia and Central and South America.

研究分野：現代ドイツ経済史

キーワード：国際金融史 世界銀行 ドイツ

## 1. 研究開始当初の背景

国際復興開発銀行 (International Bank for Reconstruction and Development) (以下、通称名の「世界銀行」(World Bank)と省略)について、その研究動向を分析した矢後(2007)によれば、主として Mason/Asher (1973) や Kapur/Lewis/Webb (1997) などの通史と言える著名な歴史研究が存在する。

矢後(2007)は、国際金融機関として世界銀行を検討し、その特徴として「資金調達と融資の非対称的な性格」を挙げている。その際、世界銀行は「債券発行を通じた市場からの資金調達を行う一方で、貸出については現地政府などの公的機関を中心とするプロジェクト融資を執行」(p.333)していることを明らかにしている。

以上のように、世界銀行に関わる歴史研究においては、一定の成果が挙げられてきたが、現代ドイツ経済史の領域において、世界銀行との関連を論じた研究には十分な蓄積がなく、これまで Schmidt (2003), Gall/Feldman/James/Holtfrerich/Büschgen (1995), Kopper (1997) などにおいて、世界銀行を通じた資本輸出や世銀債発行についての事実が断片的に明らかにされているだけに過ぎなかった。それにはドイツが世界銀行からの融資を受ける機会がなく、一貫して「資金供給国」であったことが影響している。そもそも従来の世界銀行と加盟国についての研究は、加盟国 = 「世界銀行から融資を受ける借り手」として位置づけられ、加盟国側の経済復興や開発が中心的なテーマとして論じられてきた。これに対し、本研究は、資金の「借り手」である世界銀行と「貸し手」であるドイツを検討対象とし、世界銀行を通じた開発援助資金の流れを解明することを目的としている。

### 引用・参考文献

矢後和彦「国際金融機関史」(上川孝夫・矢後和彦編著『国際金融史』有斐閣 2007年 第10章所収, pp. 321-345)

Edward S. Mason/Robert E. Asher, *The World Bank since Bretton Woods: The Origins, Policies, Operations, and Impact of the International Bank for Reconstruction and Development and the Other Members of the World Bank Group*, Washington, D. C., 1973

D. Kapur, John P. Lewis, R. Webb (eds.), *The World Bank, Its First Half Century*, Washington, D. C., 1997

Heide-Irene Schmidt, Pushed to the Front: The Foreign Assistance Policy of the Federal Republic of Germany, 1958-1971, *Contemporary European History*, vol. 12, no. 4 (2003), pp. 473-

507.

L. Gall, G. D. Feldman, H. James, C.-L. Holtfrerich, H. E. Büschgen, *Die Deutsche Bank 1870-1995*, München 1995.

Hilmar Kopper, The World Bank's European Funding, D. Kapur, J. P. Lewis, R. Webb (eds.), *The World Bank, Its First Half Century*, Volume 2: Perspectives, Washington, D. C., 1997, pp. 435-472.

## 2. 研究の目的

本研究は、1950年代半ばから70年代初頭における世界銀行とドイツの関係に着目し、世界銀行がドイツから調達した資金が、この機関を通じてどのようなプロジェクトに融資されるのか、またその融資はどのような方針やプロセスを経て実施されるのかを明らかにすることを課題とした。その際、本研究においては、開発援助資金の「借り手」である世界銀行と、「貸し手」であるドイツを双方向から分析し、上記の課題を分析することによって、ドイツによる国際金融機関を通じた資金の流れを解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の対象国はドイツであるが、その研究成果は、現代ドイツ経済史の領域にとどまらず、世界銀行との関連において、国際通貨・金融史研究の領域にも広がっている。そのため本研究では、ドイツのみならず、アメリカ合衆国に所在する国際金融機関においても資料調査を実施した。

(1) ドイツ金融史において、「開発援助」が新たな課題として挙がってくるようになるのは50年代半ばから60年代初頭である。経常収支黒字の累積を背景に、資本輸出を促進し、それを開発援助に活用するという議論が出てくることになる。世界銀行とドイツとの関係は、このような議論を発端として形成されていく。そのため、ドイツを取り巻く国際通貨・金融情勢、国際通貨基金(IMF)におけるヨーロッパ諸国間の議論について検討した。このために、国際通貨基金資料室(International Monetary Fund Archives)(アメリカ合衆国ワシントンDC)において資料調査を実施した。

(2) ドイツ銀行(Deutsche Bank)は、ドイツ資本市場における初めての世銀債発行(59年4月)から主幹事を務め、その後80年代後半まで長期にわたる世界銀行との交渉やドイツ国内の民間金融機関の引き受けにおいて、とりまとめを行った(前掲書 Gall/

Feldman/James/Holtfrerich/Büschgen (1995))。主に世界銀行とドイツ銀行の交渉過程やドイツ資本市場との関係、ドイツ側の開発援助金融への考え方について、ドイツ銀行歴史研究所 (Deutsche Bank AG, Historisches Institut) (ドイツ連邦共和国フランクフルト・アム・マイン) 所蔵の資料から検討した。

(3) 本研究の対象期間の後半部分 (60年代から70年代初頭) については、ドルが動揺し、ドイツマルクが台頭する時期である。その中で、世界銀行とドイツの関係はどのように強化されたのか、世界銀行にとってのドイツの位置づけやドイツによる資金供給の詳細について、世界銀行グループ資料室 (World Bank Group Archives) (アメリカ合衆国ワシントン DC) 所蔵の資料を用いて検討した。

#### 4. 研究成果

本研究課題の主な成果は、以下の通りである。

(1) 世界銀行とドイツとの関係について、本研究の対象とした1956年から72年までの期間は、以下のように区分できる。50年代後半から60年代前半の世界銀行は、第3代総裁ブラック (Eugene R. Black) の時代であった。61年11月にはドイツ連邦経済協力省 (Bundesministerium für wirtschaftliche Zusammenarbeit) が設立され、開発援助への関心が高まった。世界銀行とドイツの関係は、この時期に構築され、60年代後半にかけて強化された。この関係の強化には、アメリカの為替危機が大きく影響しており、第4代総裁ウッズ (George D. Woods)・第5代総裁マクナマラ (Robert S. MacNamara) の時期には、ドイツは資本市場での世銀債発行によってアメリカに替わる役割を果たし、世界銀行の活動を全面的に支えたのである。

(2) 世界銀行によるマルク融資は、主としてアジア・中南米諸国に向けられた。その最大の融資国はインドであり、「インド工業信用投資公社」(Industrial Credit and Investment Corporation of India: ICICI) を通じたプロジェクトファイナンスが行われた。また、マルクはドイツの加盟直後には、社会主義国ユーゴスラヴィアにも融資された。その後、世界銀行はオーストリア、イタリア、フィンランド、スペイン、ノルウェーなど、ヨーロッパの地域開発においてもマルクを活用した。特に世界銀行を通じたEEC未加盟国への融資が注目される。

(3) ドイツによる世界銀行への資金供給は、

50年代半ばにはドイツ連邦銀行 (Deutsche Bundesbank) を経由した公的資金が中心であり、資本金の解除や短期・中期ローンが実施された。その後、59年4月の世銀債発行を契機に、ドイツの資本市場から資金が大規模に調達されるようになった。その結果、世銀債発行とともに、ドイツの民間金融機関との関係も構築され、その関係は深まっていった。このうちドイツ銀行は、世銀債発行の主幹事としてドイツ国内の金融機関をとりまとめた。また、当時の頭取アプス (Hermann J. Abs) は世界銀行からの要請を受けて、インド・パキスタンの5か年計画の検証に関与した。その一方で、この世銀債の発行において、ドイツ銀行の共同パートナーであったドレスナー銀行 (Dresdner Bank) は、57年以降、世界銀行の貸出債権を積極的に購入し、ドイツの資本市場において、世界銀行の融資先企業の社債発行を引き受けた。ドイツ銀行も貸出債権を購入したが、ドレスナー銀行ほど積極的ではなかったという点が対照的である。

このように、世界銀行と民間金融機関との関係が構築されたが、世界銀行の資金調達への関与には、民間金融機関の姿勢によって相違がある。

以上のように、世界銀行を通じたドイツの開発援助が明らかとなり、その研究成果については学会発表を重ねて講評を仰いだ (特に下記「学会発表」)。その一方で本研究には、以下の課題が残されている。開発途上国への援助問題が国際通貨基金 (IMF) において議論されたように、開発援助に関わる国際金融機関は多岐にわたり、必ずしも世界銀行に限定されているわけではない。ドイツは60年代以降になると、アジア開発銀行 (Asian Development Bank: ADB) やアフリカ開発銀行 (African Development Bank: AfDB)、米州開発銀行 (Inter-American Development Bank: IDB) への出資を行っており、50年代と比べて開発援助のチャンネルがより多様になってきたことがわかる。

本研究の成果である世界銀行を通じたドイツの開発援助が、国際通貨・金融システムの全体像の中でどのように位置づけられるのか、また、ドイツの開発援助政策の形成とその変化、ドイツ復興金融公庫 (Kreditanstalt für Wiederaufbau) の開発援助への参入との関連でこの研究成果を論じていくことによって、その意義はより明確になると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計5件)

石坂綾子, パネル・ディスカッション「第2次大戦後の復興・開発と世界銀行 - 1946~65年 - 」, 報告3「世界銀行の資金調達とドイツ」, 政治経済学・経済史学会秋季学術大会, 2014年10月19日, 青山学院大学青山キャンパス(東京都渋谷区)

石坂綾子, パネル「1950年代の世界銀行」, 第2報告「ドイツ - 世界銀行によるドイツマルクの活用: 1952~60年」, 日本金融学会歴史部会, 2014年7月26日, 麗澤大学東京研究センター(東京都新宿区)

石坂綾子, パネルディスカッション「初期の世界銀行における復興と開発: 1944-62年」, 報告3「世界銀行の援助・融資政策とドイツ」, 政治経済学・経済史学会東海部会・経営史学会中部ワークショップ共催, 2013年7月13日, 名古屋大学大学院経済学研究科(愛知県名古屋市千種区)

石坂綾子, 「ドイツの資本輸出と西ヨーロッパ諸国支援策(1957-1961) - EPU, OEEC, IMF間の調整 - 」, 政治経済学・経済史学会ヨーロッパ統合史フォーラム, 2013年1月26日, 早稲田大学早稲田キャンパス(東京都新宿区)

石坂綾子, パネル・ディスカッション「1950年代交換性回復期イングランド銀行と『埋め込まれた資本主義』 - シティ, 変動相場, 通貨統合のトリロジー - 」, 第2コメント「ドイツ経済史の観点から」, 政治経済学・経済史学会秋季学術大会, 2012年11月10日, 慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石坂 綾子 (ISHIZAKA, Ayako)  
愛知淑徳大学・ビジネス学部・教授  
研究者番号: 40329834